

■小林哲郎 情報社会相関研究系 助教

【タイトル】

情報通信技術で民主主義を実りあるものに

【本文】

世の中では、人と人がつながり合ってネットワークを形成し、そこでさまざまなコミュニケーションが行われることで、社会全体のダイナミクスが産み出されています。こうしたものを社会の資本としてとらえ、より豊かな民主主義社会を築くために用いていければと考えています。

### 技術がコミュニケーションを左右する

現在、主に取り組んでいるのは、情報通信技術を利用して、民主主義をより実りあるものにしていくための実証的研究です。

人と人とのコミュニケーションには情報通信技術が深くかかわっており、技術が人同士のネットワークを強くすることもあれば、弱くすることもあります。例えば、インターネットが世に出始めた頃には、画面ばかり見ることになるので、人と人とのつながりは希薄になって孤独感を感じるようになるのではないかという研究が行われました。携帯電話に関しても同じような議論がありました。ところが、これだけ普及してみると、初期の懸念とは逆に、むしろこうした技術が人々のつながりを濃密にしすぎている面さえあります。このように、技術が社会にもたらす影響について、主に社会心理学的なアプローチを展開しています。

情報通信技術はうまく使えば、民主主義を機能させるための“潤滑油”にしていくことができるでしょう。そのためには、ハードとしてのネットワークに加えて、その上で心理的な信頼感や互酬性の規範が作り上げられることが必要ではないかと考えられます。信頼感とは信頼できる相手を見極める社会的知性であり、互酬性の規範とは「情けは人のためならず」ということわざに表されるように直接の見返りがなくても他者を助けるべきだとするルールの共有です。

### ゆるやかなつながりを醸成する仕組みを技術に組み込む

携帯電話を利用する人たちの間には、どのようなネットワークが形成されるのでしょうか。そうしたことをデータとして示すために、無作為に選んだ人を対象とした社会調査を用いています。すると、高頻度に携帯メールをやりとりしている人たちのネットワークは、似た者同士が集まる傾向が強いことが明らかになりました。携帯のメッセージは短いので、あらかじめ規範のようなものを共有しておかないと成立しないからです。携帯電話を使っている個々の人たちは楽しいと感じていても、内輪だけで固まれば、他の集団を排除してしまうことにもなります。民主主義に必要な妥協や寛容性が失われかねません。こうした事態に陥らないように、異質な人やふだんは会わない人たちともゆるやかなネットワークを維持できるような技術的な仕掛けを携帯電話に組み込めないかと、工学系の人たちとも一緒になって模索しています。

別の調査では、オンラインゲームのために集まる人たちは、ゲーム好きという一点だけで結ばれた脆弱な関係ではないかと考えられがちですが、後になってからお互いのバックグラウンドを知ることになるので、多様性を認めあうことになり、むしろ寛容性についてはプラスの効果が高いという結果なども得られました。

昔のように固定化された社会ではなく、ネットワークが発達し、人の流動性も高まっている中で、信頼感や互酬性、そして寛容性は、今後も非常に重要になるでしょう。

さらに、いずれ選挙活動にインターネットが利用できるようになったときに投票行動にどう影響するか、インターネット上に情報が山ほどあっても結局もとから興味がある情報にしか触れないのではないか、といった政治学的なテーマについても実証的に研究しています。

(取材・構成 塚崎朝子)